

越前和紙はすばらしいのに

橋口 侯之介（誠心堂書店）

### 越前が選ばれなかった理由

和紙がユネスコの無形文化遺産に指定されたことは、誠にうれしいことである。「本美濃紙」（岐阜県美濃市）と「細川紙」（埼玉県小川町など）とすでに登録済みの「石州半紙」（島根県浜田市）が選ばれた。

ただ、この美濃、細川、石州で終わりなのだろうか。それとも「とりあえず」として今後、追加して他の地域も指定される可能性があるのだろうか。こう疑問を呈するのは、肝心の越前和紙や土佐和紙が入っていないからだ。和紙の歴史や生産の現状を鑑みて、この二箇所が欠けているのは画竜点睛を欠く感があるのだ。

この動きを追っていた「福井新聞」には、越前和紙が選ばれなかった文化庁の説明が載っている。それによると、

「ユネスコ登録の目的の一つは伝承。登録を受けるには、次世代に技術を継承していく団体が必要。また登録の基準の一つに、保護措置が取

られているということがある」

「（ところが越前和紙には）技術を継承するための団体がなく、組織として国の重要無形文化財に指定されていない。……保存団体が、国の重要無形文化財に指定されていなければ、文化財保護法が適用されず、基準を満たすことにならない」（「福井新聞」二〇一四年十月二十九日、インターネットより）

つまり、越前和紙には、「技術を継承」することが国の重要無形文化財に指定されていないからだという。

越前和紙は、一九七六年に国の「伝統的工芸品」に指定されている。また、二〇〇〇年には越前市の岩野市兵衛さんが人間国宝に認定され、二〇一四年三月には和紙の製作用具や製品二千五百余点が国の重要有形民俗文化財に指定されている。そもそも、手すきの生産量や事業所数では国内最大の産地であり、福井県和紙工業協同組合も盛んに活動している。同組合が出す「季刊・和紙だより」もきちんとしたコミュニケーションを果たしている。博物館はもとより次世代への教育も熱心だし、何の不足もないように思える。ただ、唯一、「次世代に技術を継承していく団体が国の重要無形文化財に指定されていない」というそれだけの理由で、選ばれなかったのだ。

同じ事は、土佐和紙にもいえる。「土佐典具帖紙<sup>てんぐしやう</sup>」は国の重要無形文化財に指定されているし、手漉和紙職人・浜田幸雄さんは人間国宝である。それでも「次世代に技術を継承していく団体が国の重要無形文化財に指

定されていない」ので、無形文化遺産には登録しなかった。典具帖紙というのは、薄い楮紙で、世界中にこんな薄くて丈夫な紙はない。

西川福井県知事は、今後、登録の条件を満たすような対応として、「産地に技術保存団体を設け継承活動の実績を重ね、重要無形文化財の指定を受けて、ユネスコへの追加登録を目指す」とした（「福井新聞」二〇一四年二月三日）。国の指定を受けるまでには、手続きや日数がかかり、すぐにはできないだろうが、今後、是非がんばって欲しい。

私たちも、世界の無形文化遺産に選ばれたのは、和紙がいかに優れたもので、その伝統が現在も生かされているからだ、勘違いしないようにしたい。「次世代に和紙の技術を継承していく団体が国の重要無形文化財に指定されている」から選ばれたのである。そう考えないと、越前和紙が延々と千数百年にわたって日本の紙の中で優れた製法を伝えてきた先導的な技術と歴史が「遺産」に値しないと勘違いしてしまうからだ。美濃や石見、細川はもちろんだが、鳥の子や奉書紙に代表される越前もそれらに勝るとも劣らない歴史的役割を果たしてきた。それは同時に、和本の歴史にとっても欠くことのできない重要性をもっている。そのことを今回は述べようと思う。

## 奈良時代からの伝統

七世紀以前においても越前で紙がつくられていた可能性はあるが、はつきり史料に登場するのは奈良時代に入ってからである。

「正倉院文書」天平勝宝七年（七五五）三月、「政所符 写経所領 等」に

### 波和良紙五仟式帳 右越前国所進之紙

とあり、波和良紙（はわかみ）五千余帳が越前から貢進されたことを記している。波和良紙というのは正倉院文書にたびたび登場する種類で、従来の解釈は「葉蘘紙」すなわち稲わらを混ぜた紙と考えられている。やや品質の落ちるものだが、大量に貢進されたようだ。

その一方で、同文書の宝龜五年（七七四）「諸国未進紙并筆紙麻等事」

### 越前国 紙四百廿枚筆一百管紙麻六十斤

各国が貢進すべき紙などが未納となっている量を記した文書に、越前も含まれている。この記事には、ほかに全国二十四国から紙が貢進されていることがわかり、すでに紙は全国的な生産物になっていた。尾張国のように未進することなく貢進していたところを加えるとさらに多くなる（寿岳文章『日本の紙』一九六七年、吉川弘文館）。

平安時代に入っても、『延喜式』主計式上には、全国四十二万国（もちろん越前や土佐も含まれる）から紙の貢進が記されている。このように越前和紙が古くから生産され、都に上っていたことがわかる。

楮以外に雁皮を材料とする紙もつくられるようになり、古代においては斐紙と呼ばれた。九世紀以降、宮廷の紙屋院で漉かれた紙は上品質で、これがあつたおかげで紫式部や清少納言らの女流作家の作品が生きたと

いつても過言でないくらいである。

ただ、この体制で漉かれた紙の時代はそう長くなく、十二世紀に入る  
と紙屋院は反故からつくる紙（故紙）の製造場に変質してしまった。

中央に材料が貢納されてこなくなったため、新規の原料が減ったので、  
故紙に頼らざるを得なくなったといわれるが、むしろ地方で質の良い紙  
がつくられるようになり、それが流通によって都に運ばれてくるようにな  
ったからだともいえる。

越前が有名になるのは、この後からである。何といっても上質な雁皮  
紙である鳥の子ができるようになったことと、楮からつくる厚手の奉書  
紙の産地としてである。

鳥の子という名称は中世になってきたもので、十四世紀前半頃の記  
録から散見するようになる。『鎌倉遺文』所収の「亀山院凶事記」嘉元  
三年（一一三〇四）にこうあるのは古い方だろう。

### 結縁経御経鳥子色紙黒字赤木軸

十五世紀後半の文明年間以降になると盛んに史料にあらわれるようにな  
るばかりでなく、それが越前からたらされる質の良い紙であること  
として記述されてくる（小野晃嗣『日本産業発達史の研究』一九八一年、  
法政大学出版局に詳しい）。

たとえば、『宜秀卿記』明応九年（一五〇〇）十一月七日条に、中御  
門宜胤が越前から持参した紙は「薄様二十帖、鳥子五十枚、厚様五帖」  
とあり、薄様・厚様も鳥の子のそれであろう。鳥の子を二枚重ねて漉い

ていく打曇も越前産が尊ばれた。十五世紀後半から、鳥の子といえれば越  
前であり、その品質が上々だったことが、公卿たちの日記からうかがわ  
れるのである。

近世においても越前鳥の子の声望は高く、『雍州府史』に

凡ソ加賀奉書、越前鳥ノ子是ヲ以テ紙之最と為ス。……鳥ノ子ハ其  
ノ紙色鶏卵ノ色ニ似リ。故ニ鳥ノ子ト称ス。越前ノ産宜ト為ス

とあるし（左の画像参照）、『和漢三才図会』にも「肌滑易書、性堅耐  
久、可謂紙王者乎」とあつて最良の紙であることを示している。

いっぽう、楮の厚紙として古くから檀紙があつた。まゆみ紙ともいっ  
てかつては、まゆみの木からつくったからといわれていたが、現在では  
一貫して桑科の楮を原料とした紙であるとされている。平安時代には別  
名を陸奥紙ともいい、今の東北地方から送られてきたものと考えられて  
いる。厚いふつくらした紙で、男性の懐紙として用いた。文字通り懐に



入れておいて、い  
つでもここに歌や  
漢詩などを書きと  
めておくのである。  
公卿の日記などは、  
ほとんどこの檀紙  
を料紙とした。  
檀紙が公家男子の

紙だとすると、これよりも少し薄くて硬いのが奉書紙ほうしょがみで、中世以来、江戸時代いっぱい武家の公文書として用いられてきた。これも楮で漉いた厚手の上質な紙である。中世には檀紙も越前でつくられており、それが発展して越前奉書紙となったのではないだろうか。

### 書物を「永久」に保存する紙

このように越前で質の良い紙がつくられ、都に運ばれていたことが日本日本の書物にとって有益なことだった。

日本人は平安時代以来、書物を読みやすく、作りやすく、そして保存しやすくする工夫にたゆまぬ努力を惜しまなかったが、それは書物をつまでも保存するという強い意図があったということである。そこに紙の品質が大きくかわっている。美しく本をつくれること、千年の寿命をもつこと、そしてメンテナンスが容易であることだ。

和紙は実際に丈夫で長持ちする素材である。奈良時代の麻紙も斐紙も千年以上もつことは実証済みだし、楮紙ちよしはそれに加えて腰があつて折り曲げに耐える強さを持っている。

和本の装訂がきわめて単純な形態であることも本の寿命と関係してくる。西洋の重厚な革装は立派だが、素人には直せない。しかし、薄い表紙に糸で綴じただけの和本は、誰でも容易に直すことができる。すなわち、本を長持ちさせることは、その本を「今、持っている」人の役割な

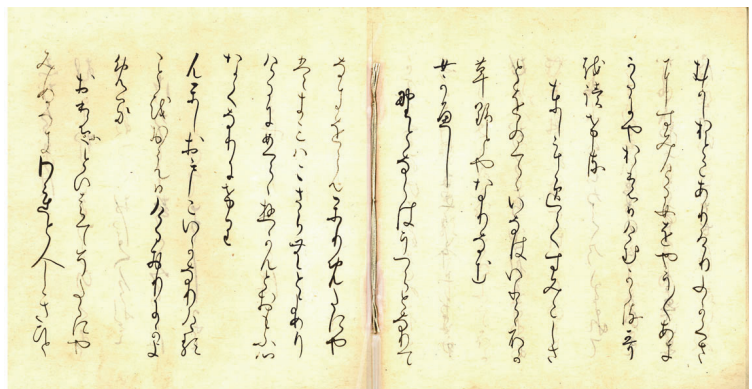
のである。そうすることで、次世代に引き継ぐ。紙は千年もつても糸はせいぜい数十年で切れてしまう。題簽の糊も薄いのですぐはがれる。表紙も傷みやすい。こうしたことは個人でも針と糸、糊があれば直すことができる。そこに和本の良さがあるのである。

江戸時代以降の和本は九割方、楮紙に袋綴じという形態である。しかし、残り一割程度とはいえず、さまざまな装訂の本があつた。古代以来の卷子本も健在だし、お経や道中記などに折本があり、拓本など書の手本は折帖である。何と

いっても歌集や物語に用いる列帖装（綴葉装）も根強い存在である（右下図はその例）。

この列帖装には必ずといってよいほど鳥の子（斐紙）が用いられる。それは、優雅な本づくりなのである。

平安時代、王朝の紙屋院で生産される紙を紙屋紙（かんやがみ）やがみなどと呼び、『源氏物語』「鈴虫すずむし」に「紙屋の人を召して、ことに

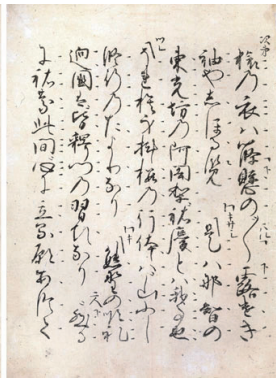


仰せ言賜ひて、心ことにきよらに漉かせたまへる」という一節がある。「蓬生」にも「うるはしき紙屋紙」と出てきて端正で美しい紙であるといつている。

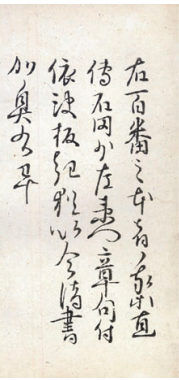
これには厚様（厚葉）、薄様とがあつて、厚様は表裏に文字を書いても裏写りすることがなかった。薄様といえども丈夫だった。これにさ



まざまな色と模様を入れるなど美しい紙を演出した。それで男性が懐に檀紙を入れていたように、女性は薄様を懐紙にしたのである。この中間の厚さもできるので、中様というこ



ともある。この「うるはしき」紙を用いて、紫式部たちは物語の冊子本を自分たちの手で制作した。あいにく当時の実物は残っていないが、その精神を受け継いだ優美な本づくりが、その後も続いた。



近世に入って、純粹に平仮名による古典文学書を印刷した慶長十三年の『伊勢物語』がある。美しい活字で印刷されたことのほかに木版の挿絵を入れ、表面に胡粉を乗せる具引きの色替り料

紙を用い、列帖装にした。嵯峨本といわれているもので、京都の嵯峨野に居た角倉素庵がスポンサーとなり書の師匠である本阿弥光悦の協力で連綿体の活字の書体を使い、中院通勝が校訂をした。仮名書き古典文学の印刷化は、〈雅〉な文学の伝統を江戸時代にもつなげていく役割を果たしたといえる。

この影響を受けて観世流の謡曲本百冊、通称「光悦謡本」と称されるものや元和六年の刊記があるいわゆる「元和卯月」といわれる謡本もできた（上図画像）。料紙に具引雲母模様などを用い、厚様の雁皮紙の両面刷りで列帖装とした豪華な本である。平安の書物そのものの形ではないが、当時の都の人たちが考えた平安への憧れが表現されたものだった。続いて、江戸時代の間、公家や上流の武士、商人たちの間で、この伝統と作法に基づいた厚様に優美な書体で書かれ、列帖装にした物語や和歌集作り続けられる。楮紙のふつうの袋綴じの木版本だけでなく、このような本も生き続けていたのである。

この料紙のすべてが越前産であるとはいえないまでも、多くは越前で漉かれてもたらされたものであることは確かであろう。今後科学的な分析方法が進んでいけば明らかになるだろう。

何よりも越前の紙へのあこがれがあったからこそ果たしたことはちがいない。本の歴史への影響力は大きいのである。できるだけ早く、文化遺産となるよう祈念したい。